

オープンキャンパス裏話

長谷川 晃（高27回）



私は高田高校卒業後に東北大学に9年、筑波の国立研究所に8年、その後また東北大学の工学部に戻って今年で16年、仙台暮らしも通算で25年になります。この間、原子力用の材料の教育と研究に携わってきました。大学に移って以降のこの十年ほどの間に、1997年の大学院重点化や2004年の国立大学法人化などいろいろと制度的な変化がありました。また少子化傾向への対策やインターネットの普及などがあり、国立大学と社会の関わりはずいぶんと変わってきたなと思っています。

これらの流れの中で思うのは、大学の教員からの研究や教育内容についてメッセージの発信先が、学会や大学生はもちろんのこと、小・中・高校生、社会人、さらに現役をリタイアされた方や、主婦や地域の皆さんと、幅広い年代の人たちに広がってきたということです。そのために多くの人にいかにして研究・教育の成果やメッセージを、分かりやすく伝えるかという情報発信のスキルと、社会の動きについての的確な情報収集を行うスキルを高めることが求められていると思います。

私の専門は原子力関連の材料ですが、私自身も原子力やエネルギー、資源、放射線応用などについて、東北地方の各地で年数

回程度の出前授業などを行って、皆さんが何を知りたがっているのか、そしてそれをいかに分かりやすく、しかも正確に伝えるかということで、いろいろと勉強しています。ここではこれに関連した活動として大学のオープンキャンパス事情について紹介させていただきます。

東北大学のオープンキャンパスは、95年に高校生向けの学科紹介という形で、工学部が学内のトップを切って始めました。その後、理系の学部が中心となってオープンキャンパスとして恒例行事化し、さらに文系の学部も含めて全学的な催し物になってきました。今年のオープンキャンパスは7月30・31日に行われ、2日間で延べ3万6千人近くの人たちが参加したそうです。工学部でも6100人近くの来場がありました。

私の所属する専攻（量子エネルギー工学専攻）は工学部の東の端にあるため人の流れの点では見学者が来にくいところなのですが、それでも2日間で1100の方が来られました。95年頃比べると数倍から十倍近くに増えています。現在は小中学生、高校生、大学生、一般または保護者の方、企業の関係者の方など、実に多彩な皆さんが見学に来られていますが、やはり主体は高校生です。個人で九州や沖縄などから来られる生徒さんもいますし、最近では東北地方の進学校を中心としてバスを仕立てて団体で来る学校も増えてきました。

高田高校からもほぼ毎年、二年生全員がバスを仕立てて一泊二日で参加してくれます。3年前には、オープンキャンパス初日

に高田高校の生徒さんを見つけて、引率の先生に連絡し、厚かましくも宿泊先のホテルまで押しかけ、夕食後のOBと現役生の懇談会にも出席させてもらいました。高田のように仙台から400km近くも離れ、車で5～6時間かかるところからたくさんの生徒さんたちに来てもらえたというのは、OBとしてだけではなく、迎える側の大学の教員としても格別の思いがします。

普段は出身地についてあまり意識することはないのですが、オープンキャンパスでは一時に全国からたくさんの人が集まりますから、私の同僚も含めて現役の学生たちも、同郷・同窓というのが気になるようで、同窓生などを見つけると結構会話が盛り上がったりしています。高田高校からは毎年10人前後の生徒さんが東北大学に入学していますが、私としてはオープンキャンパスの経験をきっかけとして、一人でも多くの生徒さんに東北大学に来てもらえればと思っています。

振り返ってみますと、私が大学受験をした昭和40年代末における大学入試の情報は旺文社の「赤本」や受験雑誌が中心で、大学からの情報は味気ない募集要項だけがたよりでした。『雪椿』をお読みになっている同窓生の皆さんも同じ状況ではなかったかと思います。それに比べると、ホームページから得られる無料で誰でもアクセス可能な豊富な情報や、オープンキャンパスでの先生方や生徒さんのための受験相談窓口など、大学側の姿勢の変化に隔世の感がします。

私の周辺の学生たちに聞いても、1/4近い学生が入試の前に一度は東北大学に来ていると答えていますから、この制度も全国的に広まって多くの高校生の皆さんが活用するようになったのだと実感しています。我が家の愚息も今年高校2年生で進路をそろそろ決める時期にあります。去年は東北大学のオープンキャンパスに行ったので、今年は東京に行ってみたくて、高校が募集した1泊2日のツアーで東京に行き、だいたいやる気が出てきたようです。遊び半分でもいろいろな大学の中に入って、その雰囲気や教育・研究の中味を体感してくるのは、受験へのモチベーションを高めるのに有効だとあらためて実感しています。

オープンキャンパスの位置づけとしては、学外向けだけではありません。学部・学科の事情にもよりますが、私の所属する学科(機械知能・航空工学科)ではオープンキャンパスが研究室配属の説明会も兼ねています。現役の1、2年生にとっては3年生になる時に決まる配属研究室の志望を絞り込む上で、必要な情報を得る大切な場にもなっています。そのために説明場所を実験室などに設定し、研究室の現場の雰囲気を知ってもらえるなどの工夫もしています。我々教員にとっても、普段あまりおつきあいのない研究室の研究内容を知るチャンスでもあります。私もこの機会を生かして他の研究室に行くことがありますが、研究内容だけでなく、机や装置の配置、整理の仕方までいろいろと参考になるものを遠慮なく見ることができるので結構重宝しています。研究室で説明に当たる4年生や修士、博士

課程の学生にとっては、自分たちの研究内容について、その背景や意義も含めて見学に来た人のそれぞれのレベルに合わせて、5分くらいで分かりやすく説明するよう指導していますが、彼らの説明がうまくいっているのか、毎年気になるところです。説明を担当する学生たちにはこの期間中にいくつかの役割を交代で分担し、まさにフル回転で一生懸命説明や質問の対応をやってもらっています。この説明の時に自分の理解力不足に冷や汗をかくことや、また逆に見学者に貴重なアドバイスを頂くこともあるようですし、他の研究室を覗いていろいろな情報を仕入れてくることもあります。

インターネットが幅をきかす昨今ですが、このようなオープンキャンパスでのマンツ

ーマンのやりとりが、学会での発表や就職活動で自分のやってきたことを分かりやすく説明する、あるいは必要な情報を短時間に整理して自分の活動に生かす、さらに年齢も違う見ず知らずの人とコミュニケーションを取るという社会人としての基本的なスキルの鍛錬の場となっていると思い、重宝しています。

今やオープンキャンパスも夏の恒例事業となって、私たちも天候や参加者数の増減に一喜一憂し、それなりに苦勞をしながらも、いろいろな出会いを楽しんでやっています。皆さんも最近の大学の事情を知るまたとない機会ですから、母校かお近くのオープンキャンパスに行って、学生さんたちとの会話を楽しまれてはいかがでしょうか。

